

国際学会におけるリウマチ性疾患調査・研究発表に対する 助成者報告書 (EULAR 2018)

日和 良介 氏 / 京都大学医学部附属病院 免疫・膠原病内科

6月15日にポスター発表を行った。演題名は、“Trough concentration of mycophenolic acid correlates with renal function and serum albumin level in Japanese patients with SLE”である。ミコフェノール酸モフェチル(MMF)はリンパ球増殖を抑制する免疫抑制薬で、本邦では2016年にループス腎炎に適応となった。MMFは内服後、速やかに加水分解され活性代謝物であるミコフェノール酸(MPA)になる。移植領域では以前から血中濃度モニタリング(TDM)が行われてきたが、ループス腎炎におけるTDMの有用性は明らかではない。そこで、日本人のSLE患者において、MPAの血中濃度に影響を与える因子について調べることを目的として研究を行った。

京都大学医学部附属病院でMPAのトラフ濃度を測定したSLE症例を集め、線形回帰分析を行って血中濃度に影響を与える因子を検討した。20例の血中濃度データを用いて解析を行い、単変量解析ではMPA血中濃度とMMF投与量、血清アルブミンの間に正の相関を、クレアチニンクリアランスの間に負の相関を認めた。多変量解析によって、血清アルブミンとクレアチニンクリアランスが独立した因子であることが示された。つまり、アルブミンが低いほどMPA血中濃度は低下し、腎機能が悪いほどMPA血中濃度が上昇する、という関係が明らかになった。ループス腎炎では低アルブミン血症と腎機能低下が起こりうるので、至適血中濃度を得るにはTDMが重要であると考察した。

様々な国のrheumatologistにポスターを見ていただき、数名の方からは興味深い内容だと言っていた。質疑応答では、血中濃度の測定方法や、対象とするべき症例について興味深い示唆をいただいた。後方視的検討の限界も改めて感じた。今後、MPA血中濃度と有効性及副作用との関連についても研究していきたいと考えている。

学会を通して、基礎、臨床あるいは両方にまたがるリウマチ学についての様々な発表を聴き、勉強になるとともに非常に刺激を受けた。また、治験が進行しているSLEや血管炎の新規治療についての発表を聴いたり、SLEの新たな分類基準とその背景についてのプレゼンテーションを聴いたり、明日からの診療につながる知見を得ることができた。